

会の請願審査の安易さが明るみに出た出来事だった。他の委員会でも紹介議員が採択に反対して問題となつたが農林水産委員会の採択も社共両党議員が「採択」と叫んでそのまま採択された。あとで「干拓中止」の項があることを知つた自民党議員も後の祭り。「意見をつける」というやりくりをしたが、結局本会議でのやり直しに発展してしまつた。

それにしても「中止」の採択は自民党議員の本首をのぞかせたものだった。栗原委員長は「あれで間違つていない。役人は保守的なので、議会が方向転換を示すべきだ。水の浄化と干拓を考えれば自ら答えが出る」と干拓は見直すべき時期に來ているという。

農林水産委員九人のうち干拓推進派は二人だけ。反対は野党二人を含め三人、見直し派が四人と、大多数は反対、または見直し説、これは自民党全体にも言えそう。個別に意見を聞くと、ほとんどの議員が「干拓は考え直すべきだろう」との意見が返つてきた。

議長、県連幹事長も経験、党実力者で地元行方郡選出の千ヶ崎惣右衛門議員も「水質や自然環境を考えれば干拓はよくない」と反対の立場。二十一日の同党議員会では「党として干拓反対の方針を打ち出すべきだ」との意見も出されたほどだった。

自民党幹部のはからいで「議会として干拓に反対」というのつびきならぬ事態は避けられたものの、農林水産委での採択というハプニングは、自民党内にくすぶる反対の意見を表面に出したといえよう。

これに対し岩上知事は「議員は干拓の意義がよくわからない。私としては反対の意味づけが納得されない限り干拓は続ける」と強気。しかし、このハプニングを通じ岩上知事の決意とは逆に与党・自民党員の意識が干拓から離れていることがわかり、今後の干拓推進に打撃となりそう。

：：茨城県議会広報：：49・12・6：：

最終日、請願で激しくもむ

霞ヶ浦請願問題で紛糾

結局継続審査へ

「解説」

今定例会では二つの議案をめぐる審議が白熱し、あるいは紛糾が起き、平穏無事に終るかにみえた本年最後の第四回定例会は、後半にいたり大きく揺れ、そのため審議は夜まで続いた。

○ その一つは十一月十八日の農林水産委員会で付帯意見つきで採択された「霞ヶ浦の水質浄化に関する請願」